

オサム・ジェームス中川

Osamu James NAKAGAWA

聞き手・構成 ■ 楠本亜紀 Aki KUSUMOTO

写真の町東川賞2010 新人作家賞を受賞

アメリカ合衆国インディアナ州在住のオサム・ジェームス・中川氏が、写真の町東川賞2010の新人作家賞を受賞した。対象は沖縄の佐喜眞美術館で2009年夏に行われた展覧会「ジェームス中川写真展—BANTA—」及び2010年にニコンサロンにて行われた「オサム・ジェームス 中川展 BANTA：沁みついた記憶」である。新人賞とはいえ、インディアナ大学芸術学部写真学科にて教鞭を執り、アメリカにおいて数々の賞も受賞している中川氏だ。日本では過去に、1995年に「第1回東京国際写真ビエンナーレ」（東京都写真美術館）にて優秀賞を受賞、1998年に行われた「メディアログ：日本の現代写真'98」（東京都写真美術館）に出展、しかしながら、佐喜眞美術館での展示があるまでは一般にはほとんどその作品についても人物についても知られていなかったといっただろう。氏の生い立ちや作品について、話をうかがった。

生い立ち～大学まで

父親の仕事の関係で1962年にニューヨークで生まれた中川氏は、生後7ヵ月で両親とともに帰国、15歳まで東京で暮らす。その後、父親の転勤を機に再びアメリカへ戻り、ヒューストンの高校に進学。大学は美術コレクターのドミニック・ド・メニルの財団が作った、ユニークな校風で知られるセントトーマス大学でアートを専攻し、写真や彫刻や絵を学ぶ。

大学を卒業してからは86～88年まで東京に戻り、伯父である写真家の小川隆之氏のアシスタントを勤める。また、ナショナルジオグラフィック、ライフ、マグナムの写真家の通訳兼アシスタントも務めるが、ステレオタイプな「日本」ばかりを対象とした依頼仕事に違和感をもつ。コマースやエディトリアルではなく、アートとしてのシリアスな写真を勉強しようと、ヒューストン大学修士課程に三年間通う。

「ヒューストンでは丁度、インターナショナル・フォト

フェストがはじまったばかりでした。アン・タッカー（ヒューストン美術館キュレーター）が中心となり、ヒューストン写真センターが立ち上がった時でもありました。それ以来、ヒューストンが世界の写真の発信地の一つとして活発的な町になっていきます。その始まりの10年の間に僕は大学院を卒業し、ヒューストンを拠点として制作や展示活動ができたことは、大変意義があったと思います。今でもあなたは、『どこの出身ですか？』と訊かれると、『ぼくは、ジャパニーズ・アメリカン・テクニクス』と答えています（笑）。」

作品制作のはじまり

大学院での主な指導教官は、ポストモダニズムの洗礼を受けた世代で、コンセプチュアルな作品を作るアーティストのエド・ヒルとスーザン・ブルーム（コラボレーション・カップル「マニユエル」として活躍）だった。二人は学生にいつも世界で起きていることに敏感であるよう、「イシュー（問題点）」を求めてきた。

「僕は詩的かつ心情風景的な作風が多かったので、「イシュー、イシュー」といわれて戸惑うところもありましたが、自分のことを考えることが世界につながると思っていました。初めて社会的なテーマに取り組んだ写真は、29歳からはじめた「ドライブインシアター」シリーズでした。この作品は、大学院でエド・ヒルが行うコンピューターの授業で制作を始めました。当時はコンピューターの授業といっても、25メガハーツのPC一台を7人くらいの生徒で使うといった状態でした。ちなみに、今の僕の使っているラップトップが、2.5ギガハーツX2ですから、信じられないくらい遅いコンピューターでした。その環境下でも、講師の「マニユエル」の作品がArt News Magazineのトップを飾り、デジタル写真作品への一筋の光を感じました。

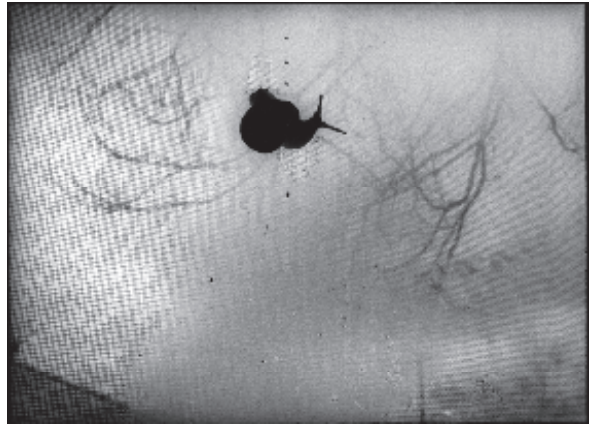
僕自身はとても人には見せられない作品をたくさん創りながら、日頃、ベタ焼きを見ながら、自分が無意識に省いている写真は何なのか、意識的に考えるようになりました。良い写真と教わった写真以外のほうがはるかに沢山あるわけで、その写真を眺めていると、普段なら選ばないような写真のなかにドライブインシアターを写した写真を見つけたのです。他にも、アリゾナでインディアンのお墓に星条旗がたっている写真があって、この二つをジャクスタポーズ（合成）することで、新しい意味を生むのではないかと思ったわけです。僕が見ていたアメリカがぼろぼろになったドライブインシアターのスクリーンに亡霊のように現れた、自分自身も憧れてきたア



「ドライブインシアター」シリーズ、アメリカンインディアン、1992（オリジナル・カラー）



「回」シリーズ、二宮海岸、秋、
1998 Japan, Autumn 1998



「窓」シリーズ、1988-2000

メリカンドリームの中の神話と現実の矛盾を突きつけられた瞬間でした。それがドライブインシアターシリーズのはじまりでした。修了制作では、ドライブインシアターとビルボードの作品を合わせて10点展示しました。それがアメリカの写真誌『アパチャー』に掲載されて、第1回東京国際写真ビエンナーレ（1995年・東京都写真美術館）、『メディアアログ』展（1998年・東京都写真美術館）への日本での出品につながります。」

大学院修了後は、98年よりインディアナ大学での就職が決った。時を同じくして結婚と娘の誕生により家族ができ、また、父を癌で亡くすという人生の転機を迎える。この経験から「回」シリーズが生まれることとなる。「父、娘、家族の絆ということ考えたときに、写真の一番の根本にある「記憶を保存すること」と「記憶を形作ること」に立ち返ることになり、このシリーズは白黒ゼラチンシルバークレートのストレート写真でやるべき作品だと確信を持ちました。銀塩プリント・デジタルプリント共に、アメリカで認められることになりました。」

デジタル写真と銀塩写真

中川氏はこの20年来、ストレート写真とデジタルでのシリーズを両立させてきた。アメリカの写真界でもようやく、デジタルかフィルムかという素材の問いから離れはじめ、作品の内面と形態のダイアログに変わってきたという。

「今や、アメリカでは「なぜケミカルでやるのか、銀塩でやるのか」ということが問われるようになってきています。今後、作品制作においてなぜその技術が作品の内容に対して必要なのか、ということに常に考えないといけない時にきているのではないのでしょうか。」

僕は今が写真の歴史の中で一番面白いときになりうるのではないかと生徒達に良く言います。ストレートあり、デジタルあり、リアリズムあり、ピクトリアリズムあり、ドキュメンタリーありと、色んな写真の可能性を秘めているのですから。生徒の中には、デジタルで撮って、加工し、ネガをインクジェットでプリントして、ダグレオタイプの写真を創っている者もいます。写真は現代アートであるから自由に個々のイメージネーションで

表現することは否定してはいけないということを、これからも生徒たちに伝えていきたいと思います。手法においては選択肢を多く持ち、スタイル以上、コンセプト以上、人の心を動かせる作品を創っていきたく、常に自分の中で反芻しています。」

「バンタ(崖)」と「ガマ(洞窟)」のシリーズ

現在制作を続けている沖縄のシリーズは中川氏にとっては必然の選択だった。娘に住んでいるアメリカのことだけでなく、日本と、妻の生まれ故郷である沖縄のことをきちんと伝えておく必要性を感じていた中川氏は、2001年にまずは単身で沖縄に2週間滞在した。

「沖縄本島、伊江島、久高島などの島巡りや、基地の周辺、戦争の記念碑、資料館などを辿り、探究心に基づく観光でしたが、とくに、平和記念資料館で見たビデオは今でも忘れられない経験となりました。アメリカ兵が撮影していた、嵐のような砲弾と、崖を飛び降りていく人を見た後、資料館の外に出ると、真っ青な空と海、下は絶壁。今見たばかりのカラーの8mmフィルムの映像と目の前の風景が、僕の頭の中で恐ろしいイメージを映し出したんです。その体験が記憶に残り続けていたんですね。」

4年後、大学の長期休暇を利用し、家族と共に沖縄に滞在する機会を得る。ちょうどその頃、友人の風景画家が絵を描きにフランスのノルマンディ（D-デイのあった地）に行くという話を聞き、沖縄に行くならバンタ(崖)の面を見てみたいと、その撮影を思いつく。

「まずは、リンホフのパノラマカメラで撮影したものと、デジタル一眼レフカメラで縦に何枚かつなげ、パースペクティブを修正した作品を作って見比べてみました。そうしてみると、後者のイメージが日本画や中国山水画をみるときのように、視点が浮いて見えることがわかりました。今までの僕の作品はアメリカと日本の狭間でin-betweenだという感覚があったのだけど、今度は浮いているんです。宙に浮いた所からのfloating viewです。」

望遠レンズで覗いて撮ってくる行為というのは、探す行為でもあります。ズームすると見えてくるものがある。人の見る行為というのは、実際には部分をつなげて全体

を視ていますが、望遠レンズでの撮影はそれに似ている。ストレート写真よりも、「見る」ことに近いのではないのでしょうか。リンホフで崖の全体を撮っても、レンズのディストーションや、被写界深度の限界で、一枚で吸い込んだ写真には、どうしても自分が見ていた崖のイメージが写っていないんです。これで、その当時、発売されたばかりのフルフレームで一番解像度が高いキヤノン5Dを使うことにしました。」

デジタルカメラを使うにあたって、念頭にあったのはニューヨーク近代美術館でみたアンドレアス・グルスキーの写真だという。離れてみると印象的だが、近づくとピクセルが見えてしまう写真に幻滅を感じた経験から、遠くから見ても、近くからでも何かが見えてくるような写真を作りたいと考えていた。さらには、死んだ人たちのスピリットや、爆弾のあとのような、写真には写らないものがシャドーのなかに浮かび上がって見えてくるような作品を求めている。

「デジタルカメラが、やっと僕が表現したいものにより近い高解像度が可能になっていました。撮影時とその後のフォトショップでの繋げる行為、そして描く行為とが、最終的なインクジェットプリンターでのファインプリンティングにつながることによって、バンタの作品が写真の持つ現実性以上にフィジカルに『視る』ということを作る側にも観る側に求めているのではないのでしょうか？」

現在制作中の「ガマ（洞窟）」シリーズも、負の歴史を背負っているランドスケープだ。バンタ（崖）の最後に制作したえぐれた洞窟の写真の前に、集団自決の問題を考えたとき、「ガマ（洞窟）」は避けて通れない課題となった。

「ガマは沖縄人祖先の魂の宿る場所、神聖な場所です。そう簡単に入っては行けない所です。妻の親戚は変な霊を連れて帰ってきては困るとの願いもあって、ユタ（霊媒師）に相談することになりました。意外にも「寅年のあなたは権現を開く力を持っているから、洞窟に入っても大丈夫よ」と、ユタから言われます。その言葉を聞いて、安心して撮影に向けての試行錯誤を始めました。まず、どうやってバンタと同じような時間をかけた表現の仕方ができるかどうか。暗い洞窟のなかでフラッシュを炊いて切り取って終るという作風は避けたかったので、被写界深度を絞り、シャッターは開放、洞窟内を懐中電灯で10分くらいかけ光で描き出しながら撮影しました。そこから同じ時間デジタルのバックが情報を書き込むので、真っ暗闇で更に10分じっと待ちます。懐中電灯の光源が影響し、イメージは緑色になってしまうので、色合いやシャドーの暗明等をフォトショップで自分の洞窟の中にいたときの記憶とイマジネーションを使い、色を描き出す行為もしています。洞窟のなかは真っ暗闇だから、その本当の色、自然の色は何かといわれても答えようがありません。火炎放射器で真っ黒に焼け焦げた洞窟もあります。撮影のときには気づかなくても後で見えてくるものもたくさんありました。」

沖縄との関係

2009年、佐喜真美術館（沖縄県宜野湾市）にて初めて「BANTA」を発表し、高い評価を得ることとなった。

「最初は親戚も含む多くのウチナンチュの方々の反応に緊張していましたが、予想以上に反応が良く、以降、サポートや作品につながるアドバイスが得られるようになりました。僕は、アメリカではアジア系マイノリティの側。何をやっても、ベストを尽くさなければ認められません。日本では、日系の方ですねと、外者扱いされてしまう部分があり、いまいちフィットしない自分がいます。日本でもない、アメリカでもない、どちらにも属しきれないアイデンティティが、日本とアメリカの狭間にある「沖繩」に自分を重ねて考えた時、その矛盾が近い構造を孕んでいるように思えました。

アメリカの社会批評家、ベル・フックスの講演会を聞きにいったときに、黒人のことは黒人しかやってはいけないのか、当事者しか問題に関わるべきではないのか、という質問に対して黒人である彼女は、そんなことはない、誰でもやっていい、しかし、『あなたがどのように他者に対しての立ち位置をクリアにするのか、作品で解くことです』と答えていたことがあって、その言葉に勇気もらっています。沖繩の問題は沖繩の人しかやってはいけないのではないはず。今までたくさん、本土の写真家達に切り撮られてきたステレオタイプ、エキゾチックな沖繩のイメージとは異なる、クリティカルな問題提示をしなくてはならないと思います。そして、作品が知識で理解し得るレベル以上に、アートとして人の心をつつといるところまで突き詰めないといけないと心に命じて作品創りをしています。

実際、何故ここまで沖繩の作品を創ることになったのかと問われれば、僕自身、吸い込まれたとしか言い様がありませんし、アメリカと日本と沖繩の三つの祖国を持つ娘に父として伝えたい、きわめてパーソナルな、ビジュアル・メッセージなのかもしれません。」



【おさむ じえーむす なかがわ】

1962年ニューヨークに生まれる。1963-77年東京在住。1986年セントトーマス大学スタジオアート学士号。1986-88年東京在住、小川隆之氏に師事、マイケル・ヤマシタ氏アシスタント。1993年ヒューストン大学写真学修士号。2001年サンタフェアートセンタープロジェクト1位受賞、2002年ライトワーク・レジデンシー受賞。現在、インディアナ大学芸術学部写真学科長、准教授。ニューヨーク・グッゲンハイム財団のフェローシップを受け沖繩での制作を行っている。http://www.osamujamesnakagawa.com